

【紹介】

ベーコン著、川西進 訳『ニュー・アトランティス』岩波書店、2003年
博物館史における位置と学芸員課程の授業での紹介について

Francis Bacon's *New Atlantis*

Its Position in the History of Museums and its Use in Museum Studies Courses

鈴木 一彦*

Kazuhiko SUZUKI

著者のフランシス・ベーコン (Francis Bacon 1561-1626) は、近代哲学の確立者、また科学者として知られている。イギリス国王に仕えた廷臣であり、ジェームズ1世のもとで大法官まで務めた法律家、政治家でもあった。そのようなベーコンは、経験と実験に基づいた、人間の福祉に役立つ学問を重視した。本作品は、未完成とはいえ晩年の重要作品であり、空想文学の形式を取りながら、自然科学の研究所 (博物館的施設を含む) が国の福祉を増進するという、ベーコンの思想と構想を伝えている。執筆年は不詳。ベーコンの没後、1627年にベーコン家の司祭ウィリアム・ローリーにより刊行された。岩波文庫版は最新の邦訳で、平易でわかりやすい文体の本編に加え、訳者による丁寧な解説が添えられており、作品やベーコンの思想の理解に役立つ貴重な一書となっている。

ベーコンは、旧来のアリストテレス学派の論理学が新しい発明・発見に対して無力であると感じ、若いころから諸学の「大革命」を企てて、『学問の進歩』、『ノヴム・オルガヌム (新機関)』など多数の著作を残した。なかでも、彼は、経験に基づく新しい博物学 (博物誌、自然史) を重視していた。歴史学者のポーラ・フィンドレンは、ベーコンが、探検航海や探査行の時代にあって、「博物学を新しい自然哲学のパラダイムとみなし」ていたとし、イタリアの蒐集家たちがアリストテレスなど古典を権威とする姿勢を変えなかったことと対比している (フィンドレン 2005 pp.13-17)。また、ベーコンの最後の著作が、『ニュー・アトランティス』と併せて刊行された、『森の森、あるいは博物誌』であることも注目されるだろう。

『ニュー・アトランティス』が属するとされる架空の理想国家を描写する文学 (ユートピア文学) には、古くはプラトンの『国家』や『法律』などがあるが、ルネサンス期以降においては、有名なトマス・モアの『ユートピア』(1516年)、トンマーゾ・カンパネラの『太陽の都』

* 千葉大学普遍教育

(1602年)、ヨーハン・ヴァレンティン・アンドレーエの『クリスティアノポリス』(1619年)などが連なる。このうち、モアとカンパネッラの作品には、政治的な事情が濃厚に反映され、痛烈な社会批判の意味合いがある。どの作品中の社会でも指導者や市民は賢明で、理想的な生活を送っている。なかでもベーコンの作品では、市民の福祉を支える学術研究が、一般の市民生活とは隔てられた特別な機関によって行なわれていることが特色である。ベーコンの描く孤島「ベンサレムの国」(主人公である語り手が、ペルーから中国、日本への航海の途中に辿り着いたとされる)には、「サロモンの家」と呼ばれる総合的な自然科学の研究所があり、さまざまな資料の収集と保存、栽培・飼育、実験、研究を行なっている。美術史学者のホルスト・ブレーデカンブは、これを「クンストカマーの理想像」と表現し、ベーコンの構想の博物館的性格を論じている(ブレーデカンブ 1996 p.87)。彼が言うところの「クンストカマー」は、単なる珍奇趣味のコレクションを意味した言葉ではない。そこではすでに、自然史に影響を与えるような自然観が形成されていたと考えているのである(ブレーデカンブ 1996 p.13)。

ところで、本作品のタイトルには、プラトンなどが伝える伝説の国・アトランティスの名が含まれている。作品中で語られるところでは、「ベンサレムの国」の歴史はアトランティスの時代から続いている。しかし、アトランティスの帝国主義的な傲慢さと、後の破滅と衰退の道とは異なり、この島では、約1900年前の賢王が、豊穡な土地を活かして自給自足を行なうことを決断した。彼は、「サロモンの家」を創設して、被造物の研究を重視しながら幸福な国づくりを目指し、これまでの長きにわたる繁栄の基礎を築いたという。

筆者は、このベーコンの『ニュー・アトランティス』を、博物館の歴史や理念を考える上での重要な作品の一つとして、自身が担当する「博物館概論」の授業で取り上げることにしている。

近代博物館の成り立ちについては、これまで科学技術の普及や市民教育の面から論じられており、そのほか近代国家の政治的シンボル、さらには植民地主義・帝国主義の現われとも見られる。それらに加え、本作品のような文学の存在を考慮すると、科学への期待の高まった時代における理想社会への〈ビジョン〉のようなものも、後の近代博物館の形成に影響していたことがうかがわれる。『ニュー・アトランティス』は、刊行直後から各国語に訳されて広く読まれることになる。ベーコンの構想は、1660年のイギリスのロイヤル・ソサエティ(王立協会)など学術団体の設立を促すこととなり、ロイヤル・ソサエティでは、早いうちから収集した標本などを収める「レポジトリ(Repository)」と呼ばれる施設を持つ(The Royal Society “History of the Society”, 高橋雄造 2008 pp.83-96)。これは、オクスフォードのアシュモレアン博物館の開館(1683年)に先立つ動きである。オクスフォード大学にトラDESCANT父子のコレクションを寄贈したエリアス・アシュモールは、ロイヤル・ソサエティの会員でもあった。

授業で取り上げる場合には、たとえば、博物館の基礎である収集・保存・研究活動に、かつてどのような社会的役割が期待されていたのか、参考とすることができる。「サロモンの家」は、物語の中では教団とも学会とも呼べる団体なのだが、「すべてのものの本性を発見(それによっ

て神は創造のみわざの栄光をいっそう顕し、人はすべての被造物をいっそう実り豊かに活用できるように) するための施設」であるという (p.35)。この学術団体は、人々の福祉を増進するものとして、その社会的役割が明確なのである。ローリーは、「読者に」と題された小文の冒頭で、「この寓話は、わがベーコン卿が、人々の益となるよう、自然の解明と、数々の驚嘆すべき大規模な装置のために設立される学院〔中略〕の雛型あるいは概要を示そうとされたものであります」と言う (p.6)。『ニュー・アトランティス』は、特に政治学や社会学の観点からは、これまで必ずしも高く評価されているとは言えないが、授業においては、その後設立される学術団体や博物館と関係しているという歴史面を取り上げたい。

実際、西洋の博物館史を授業で扱う場合には、キャビネットやクンストカマーの時代から、近代公共博物館への移行の説明はかなり複雑である。16世紀にはイタリア諸都市の大学が医学研究のための博物学講座とともに植物園(葉草園)を持ったほか、ドイツ、フランス、オランダにも植物園が作られる。17世紀には各国の学術団体やイエズス会によるコレクションが生まれる。18世紀になると分類学が発達していく。しかし、そのような展開の原動力については、これまで特に取り上げられないことが多かったのではないか。この時代には、多くの科学者たちにより自然科学が発達したのだが、背景にベーコンのように研究所や博物館の設置を提唱した哲学者の存在があった。近代博物館の成立には、王侯貴族たちの中の珍奇趣味の流行だけでなく、大学や学術団体での専門的な研究による人間の福祉という、〈理念〉や〈ビジョン〉も関与している。このことを学生たちにもっと紹介すべきだと筆者は考えている。

実際の授業では、時間が限られ、歴史には十分な時間が取れないかもしれない。しかし、博物館の社会的役割は、近年ますます重要度を増しているテーマでもある。『ニュー・アトランティス』は、キリスト教国の物語で、人間中心の自然観や科学に対する楽観も見られるが、そこは17世紀のイギリスという時代背景や、これが文学である点を考慮すべきであろう。また、「ベンサレムの国」は、他国から独立して自給自足を行なう豊かな小国で、設定上は帝国主義や文化侵略とは無縁である。私たちが注目すべきなのは、研究活動を市民生活へ役立てるといふ、社会貢献を目指す理念的側面であろう。現在、博物館が社会における役割や使命を模索している中で、学芸員資格を目指す受講生たちに本作品を紹介し、新しい感性でこの問題を考察してもらえればと思う。

最後に、「サロモンの家」がどのような博物館的施設を持つのかを紹介しておきたい。訳者も指摘しているように、『ニュー・アトランティス』は未完成であるため、後半にある多数の研究施設の説明は箇条書きのようで、十分な文学的描写がされていない点は残念である。しかし、研究用の果樹園・菜園や鳥獣園、発明品の展示場が登場し、かなり詳しくその内容や目的が説明されている。この部分は、「サロモンの家」の長老が、物語の語り手一人だけに明かすという形で描写される。

まず果樹園・菜園では、接ぎ木、芽接ぎ、促成・抑制栽培などあらゆる実験を行なうほか、

「手を加えて自然よりはるかに大きく成長させ、より大きく、甘く、天然産とは異なる味、香り、色、形の実を結ばせる。その多くを薬用に供するための処置も行う」とされている (p.55)。「薬用に供するため」という点など、人々の日常生活と密接に関連した、実用性への強い志向が感じられる。

鳥獣園では、「珍しいものを人に見せるためだけでなく、解剖と実験のためであり、それによって人体にどのような処置を施すことができるかを理解するためである。それによって例えば、身体の重要と思われているさまざまな部分が朽ち、切除されても、生命は維持されること、一見死んだと思われたものが再生するなど、多くの不思議な成果を得ている」と説明される (p.55)。また、毒物・薬物の試験的投与、生殖実験なども挙げられている。さらに、種の混交や新たな生物種の創造のような技術もあり、やや不気味さも感じることは否めない。時代的にも錬金術の影響があるかもしれない。それはともかく、ここでも、鳥獣そのものの研究より、人間生活の向上が重視されているのである。

発明品の展示に関しては、次のように語られる。「展示と礼拝に関して言えば、たいへん長く立派な会場が二つある。その一つは各種の著しく優れた発明品の模型と見本を展示し、もう一つの方は主な発明家の像を一人残らずおいている」(p.64)。それらにはコロンブスも含まれ、さらに船舶、大砲、火薬、音楽、文字、印刷術、天文学上の諸事実、金属工芸、ガラス、蚕の絹、葡萄酒、麦とパン、砂糖の発明者と続く。そして、研究員たちの礼拝について語られる。「われらの労働に光を与え、それを聖なる善なることに用いられるよう神の助けと祝福を乞う一定の形式の祈りもある」(p.65)。記者はここに、科学文明の発達に対する戒めを見出している。

現代では、先端技術研究の舞台は大部分が大学や研究所に移っているが、博物館も市民へのさまざまな貢献が可能である。ただ、時代や地域の期待に応えるためには、基本となる収集、保存・研究、展示、そして教育やコミュニケーションといった活動全般を常に見直していく必要がある。時には、館の役割や使命(ミッション)を考える機会もある。その際、さまざまな経営技術とともに、利用者となる一般市民に対する〈姿勢〉や〈気持ち〉が重要になるだろう。これからの博物館経営を考える上で、博物館史において精神面の一端を担う『ニュー・アトランティス』は、多くのヒントを提供すると思われる。

引用参考文献

高橋雄造 2008『博物館の歴史』法政大学出版局。

ポーラ・フィンドレン (伊藤博明・石井朗訳 2005)『自然の占有』ありな書房。

(Findren, Paula 1994 “Possessing Nature” University of California Press, Berkeley.)

ホルスト・ブレーデカンフ (藤代幸一・津山拓也訳 1996)『古代憧憬と機械信仰』法政大学出版局。

(Horst Bredekamp 1993 “Antikensehnsucht und Maschinenglauben” Wagenbach, Berlin.)

The Royal Society “History of the Society” <http://royalsociety.org/> (2009年6月検索)。